

シンポジウム

テーマ：『ロータリーと寛容の精神』

出席者

パネリスト

第2580地区パストガバナー

佐藤 千寿

第2670地区パストガバナー

三宅 俊三

第2790地区パストガバナー

土屋 亮平

コーディネーター

第2640地区パストガバナー

大澤 徳平

本日のシンポジウムの大役コーディネーターを仰せつかりました堺ロータリークラブの大澤徳平でございます。

年度始、楠ガバナーより『地区大会のシンポジウムは一つ貴方に全てをお任せするからよろしく頼みますよ』とのお言葉を頂き、ノウとは言えないロータリーの決まりですからお受けいたしました。正直いって私には荷の重いものを担ぐことになりました。

全てを任すということは、お題もパネラーもすべて決めなければなりません。私は先ずパネラーをどなたにお願いするかから準備にかかりました。幸い私は1988年より関西

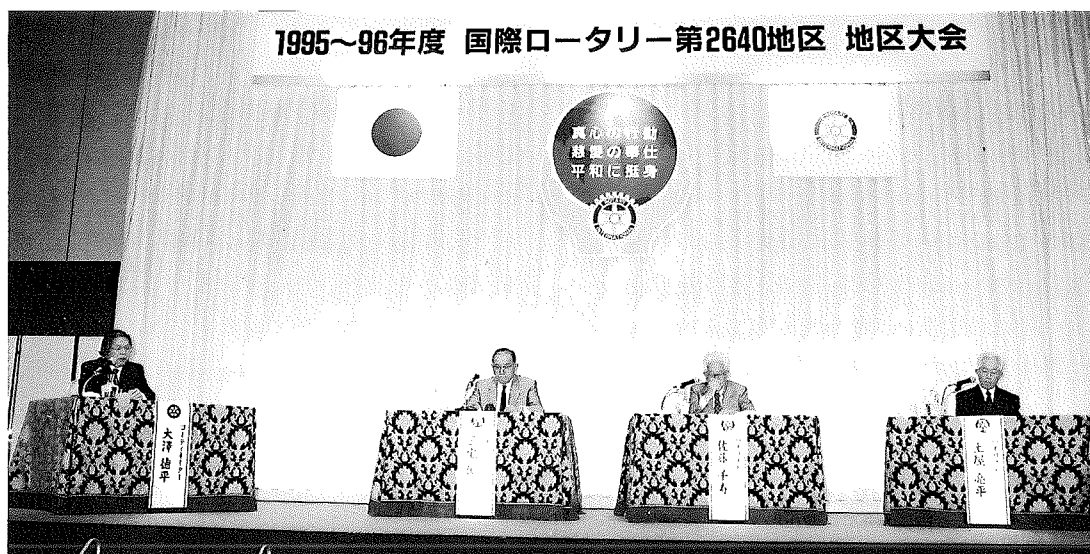
ロータリー研究会の世話人をさせて頂いておりますので、日頃何かとご教示願っておりますメンバーの中からお願いしようと考え、お顔を思い浮かべております。先ず浮かびましたお方が、本日の中央にお座り頂いた佐藤千寿パストガバナーでございます。

今日、日本のロータリアンの中で一番本音でしかも辛口で、歯に衣着せぬご批判をなさっている方と言えば佐藤パストガバナーではないでしょうか。

佐藤PGから教わったものに、英国のエドモンド・バーク氏の言葉がございます『悪魔は善人に対して、自分に協力してくれとは決して言いません。あなた方は黙ってみてくれ、と言うだけです。そうすれば、どうなるでしょうか。この世は悪魔の思うままになります』善人は黙ってはいけないのです。良いことは良い。悪いことは悪いと勇気をもって積極的に行動しなければならないのです。『私はそれを実行しているだけだよ』とおっしゃっておられます。

パネラーをご快諾頂くとともに、本年は国連が定めて『国際寛容年』でありますので、『寛容の精神でいこう』とお題も一気に決まりました。ロータリアン一人ひとりに、もっとロータリーの心を知ってほしいと思う昨今ですから、ロータリーの心=寛容の心を説いて頂くことは、時を得た意義ある時間になると思いました。

次いで皆様から見て右席の土屋亮平パストガバナー、私のお隣の三宅俊三パストガバナーをお願いいたしました。このお二方は平岡パストガバナーと同じ1988~89年度のガバナーをおつとめになられた方です。詳しくは、ご発言頂く前に改めてご紹介申し上げます。



このお三方の共通点は『Service Above Self』ではなく『Service Not Self』の毎日を過ごされていることです。

皆様も良くご存知のロータリーの第一標語『超我の奉仕 Service Above Self』ですが、この言葉は1911年にミネソタ州ミネアポリスロータリークラブの初代会長フランク・ベンジャミン・コリンズが『ロータリークラブ組織の中において成すべきことが一つある。そしてそれは直ちに行動を起こすことである。自己のためにロータリーに入会したものは間違った会員であり、ロータリーは自己のためではない。奉仕だ。自己ではない。Service Not Self』と演説したのです。後に、自己否定が強すぎるという理由で1920年『Service Above Self』と変えられ、ロータリーの標語としたのです。

前置きが長くなりましたが、そんなお三方から、それぞれ『寛容の心』を紐解いて頂きます。まず佐藤パネラーよろしく願い申し上げます。

国際寛容年にあたって



佐藤 きょうは、私が尊敬する松本直前理事、今井現理事のお二方を前にしまして、シンポジウムというのはちょっと気おくれしているんです。とにかくお二方の現職の理事を前にして、私どもは国際ロータリーに対して耳の痛いことも申し上げるかもしれませんが、ご勘弁を願いたいと思うのでございます。勿論、私はよく存じあげておまして、松本さんにしても今井さんにしても、全く正統派のロータリアンですので、私どもの申し上げることは当然、同感していただけることだと思っております。

時間がございませんので、早速「国際寛容年」について申し上げますが、国連のテーマと国際ロータリー会長の出すテーマはどこかでつながっているのでございます。私、翻訳をやっていて、毎年の会長のテーマを見ていますと、R.I.の会長のテーマはその会長の宗教と国連とつながっております。1994年が「国際家族年」でございます。そして95～96年度が「寛容年」でございます。94～95年度のビル・ハントレー会長のテーマは「友達になろう」でございます。今年の会長はブラウンですが、ビル・ハントレーの「友達になろう」という中に、国際協議会でビル・ハント

レーがガバナーノミニーの皆さんに話した演説の草稿を先に私がもらって読んでいるものですから知っているんですが、「友達は忍耐強い、友達は情け深い、友達はねたまない、自慢しない、自分の利益を求めず恨みを抱かない」という一節があるんです。

これは今井先生を前にして、釈迦に説法で申し訳ないんですが、有名な「コリントの信徒への手紙」から換骨奪胎したものだということです。私も「友達は忍耐強い、友達は情け深い——」と読んだときに、あ、どこかで聞いたような言葉だなとすぐ思ったんです。考えてみましたら「コリントの信徒への手紙」でございます。「愛は寛容にして慈悲あり、愛はねたまず、愛は誇らず驕らず、非礼を行わず、己の利を求めず慣らず」——これをそっくり「友達は」ともっていったんでございます。要するに、愛と友達を取り替えただけのことでございます。

この愛の話をしていると、もうそれだけで、聖書で言っている愛、もともとはギリシャ語の「アガペ」ですが、これを解説しなければならず、そんなことをしていたら1時間ぐらいたってしまいますのでやめにします。95～96年度のブラウン会長のテーマは「真心の行動、慈愛の奉仕、平和に挺身」となっておりますが、真心の行動と慈愛の奉仕ということは、すなわち寛容でございます。そして寛容から次に平和に挺身とつながるわけですが、これは、同時に国際家族年のことも念頭にあったからです。

したがって、このリーフレットをご覧ください。いまだかつてなかったことですが、「慈愛の奉仕」として、まず「家庭において」と来ますね。「あなたにできます、慈愛の奉仕、家庭において」、そして「平和に挺身、あなたにできます、家庭において」、「家庭は社会の基礎単位です。平和はまず家庭から。暴力や暴言はやめましょう」と書いております。「家族の仲たがいを解決してください。あなたの家庭を世界で最も重要なものにしてください。」これは正に寛容の精神でしょう。

ここでもって国連が今年を寛容年に指定したくんだりもちょっとご紹介いたします。

まず、国連寛容年の宣言文にはこう書いてございます。

「人はみなその能力、信条において異なっており、こうした相違があるから社会生活が豊かになる」。これを読んだときに、すぐに思い出したのはポール・ハリスの言葉でございます。「一種類の花、一つの色ばかりの花壇に何の面白さがあるろう。いろいろあってこそ人生に薬味が効くというもの

だ」、これは『This Rotarian Age』に書いてあります。

こういうことも国連は言っております。いま冷戦が終息しましたが、われわれは冷戦の終結とともに平和の配当を得られると思っていました。ところが平和の配当どころか、いま、われわれの前にあるのは紛争の配当でございます。国連はこれを問題にしたわけでございます。しかも、いまの紛争は新ナショナリズムと言われるようなもので、かつてのナショナリズムとまた一つ違うわけでございます。かつてのナショナリズムは、それぞれ孤立しても存在し得た世界のナショナリズムでございます。いまの世界はクロスボーダー、国境が混じりあっているわけです。そういう中でナショナリズムが高まってくると、当然、相手の国の既得権とか固有の文化とか衝突するわけです。しかし、これを抑えようとする、つまり国際化と称して国際的な基準に合わせようなんて思うとすぐ反発が起きます。あるいは内政干渉だとなります。相互依存の世界でありながらナショナリズムがどんどん高まってくることはたいへん危険なことでございます。

そこで国連はこう言っております。

「こうした危機的状況下にある人類にとって、政治的な計画や活動ばかりでなく、民族・社会規範、宗教の壁を超えて、等しく人間として平和共存する広い視野が必要である。すなわち希望、目標、理念、原理が求められている。しかし、世界じゅうどこにおいても人はこのようなものを手にしていない。これこそ、ただいま現在の世界における紛れもない事実である。されば、近代国家が名実ともに良心の自由を保証する限り、社会的身分、肌の色、言語、宗教にかかわらず、すべての人に受け入れられる信条と規範を充足する共通の価値観を共同で模索することが必要なのである。

同時に、人はみなすべて性、年齢、人種、言語、宗教、政治的見解、国家的・社会的身分による区別にかかわらず、譲ることのできない、触れることを許さぬ尊厳を有している。しかるがゆえに、個人・国家を問わず、すべてのものはその尊厳を尊重し、これを効果的に保護すべき義務を負っている。

人間は、個人あるいは地域社会として、常にそれ自体が権利の主体であり目的であって、政治・経済・マスコミ媒体・研究機関等における単なる商業主義、産業活動の対象ではない。ところが一方、いまの時代にはいかなる人間個人も、いかなる社会階層も集団組織も有力企業も、さらに

また国家でさえもみな善悪両面のしがらみに縛られているのである。」

これを読んだときに、私はすぐに「根本問題としてロータリーは自己のために利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感と、それに伴う衝動との間に起こる争いを和解させようとする人生の哲学である」というのを思いだしました。

国連は、すべてのものが善悪両面のしがらみに縛られて、そこで身動きがとれなくなっているんだと宣言しているわけです。だから、何とか共通のものを探そうじゃないか。様々な宗教が唱道する倫理的価値観に新しい共通理念を導入することが必要だと考えます。ところが、これで世界宗教会議をやってみると“総論賛成・各論反対”で絶対にまとまらない。宗教にゲタをあずけても寛容を得られないのです。

大体が宗教というものは、ガバナーを前にして申し訳ありませんが、不寛容なものでございます。寛容というのは非常に難しいことございまして、寛容々と安易に言うならば、私は即座に問い返します。「しからば不寛容に対しても寛容であり得るか」と宗教が寛容と云って教団の戒律に反するものまで許したならば、宗教の自殺行為でございます。しかし、それでもなおかつ寛容を求めなければならない。寛容は平和を示す新しい呼び名でなければならない。国連はいまここでジレンマに陥っているわけでございます。

一方で、ロータリーの精神は何だと言われたら、皆さまご承知のとおり、ポール・ハリスがあるところで「たった一言で言えるロータリーの精神は何ですか」と聞かれた時、「それはtolerance(寛容)だ」と言った。そして事実、ポール・ハリスは常に寛容の精神でいろいろ意見のわかれていた初期のロータリーをまとめてきたわけでございます。

ロータリーで宗教と政治の話をしたくないというのは、ポール・ハリスの『This Rotarian Age』にも書いてあるように、いかに初期のピューリタンが不寛容であったか、いかに他の異教徒に対して冷酷であったか、痛感したからです。日本人にはちょっとわからないぐらい、一神教というものは厳しいものでございます。ですから、ロータリーの席では宗教論争はやらない。「喧嘩になるような議論はやめろ」とポール・ハリスは書いております。

そうかといって寛容がルーズであっていいのか。ルーズなものが寛容だと言えるのかどうかとなると、私はそんな

寛容は平和に至る道ではないと思うのでございます。結局、寛容というものは、まず法と秩序があることが前提になります。これは民主主義の原則に立って、すべての人が自由に発言する権利を与えられるという状態にあって、その中で多数決の原則によって法と秩序を確立する。そして初めて、その法と秩序の中で「寛容」ということが生きてくるんだと思うんです。そういうことを前提にいたしまして、これから他の2人の講師の方に後のほうは譲りたいと存じますのでよろしく願いいたします。(拍手)

大澤 佐藤パネラー 有り難うございました。『完璧な姿の寛容など人間社会に於いては在り得ないのだ』と先ずは総論を説いていただきました。続いて各論に入っていただきます。

先ずは土屋亮平パストガバナーをお願いします。土屋パネラーは先ほどご紹介がございましたように千葉の松戸市からおいで下さいました。1988年7月の『ロータリーの友』に掲載されたガバナー紹介記事には『待望の理想的指導者』と大見出しで『温容という言葉がぴったりする松戸の素封家で、旧家ではぐくまれた人となり、にじみ出た好紳士、慶應大学卒業と同時に3年間、大阪の商人の元で修行された」と記されています。ここ大阪は懐かしい思い出の地でございます。

またガバナー時代の土屋月信に『私たちは自分に見える人達と、見えない多くの人達の助けを借りて生きているし、いや寧ろ生かされていると言ったほうが正しいかもしれない。日常生活の全てにおいて無数の人の尊いサービスにより、我々は生きているのではないのでしょうか。そして反面我々自身もまた見えない手助けとして、誰という特定の人ではないまでも社会のために参画しているのであります。私たちは常に好むと好まざるとを問わず、社会の中、世界の中で他人との関わりあいの渦中に生きてゆかねばなりません。その上自他を容認しながら、各々の個性や意志を互いに調和させながら生き続けなければなりませんし、様々な人々との関わりあいを通して自分自身を見つめ直し、自分自身との新しい出会いが始まるのではないのでしょうか』とお書きです。土屋パネラーのお人柄「寛容の心」が伺えます。

ロータリーは親睦があって奉仕があると云われています。ロータリアン同志の心と心の触れ合いがロータリーの奉仕の精神を磨きあげるとも云われます。果たしてどうでしょうか。そこら当たりから寛容の心を紐解いて下さい。

ポール・ハリスの基本精神を再確認



土屋 ただいま過分なるご紹介をいただきました松戸ロータリークラブの土屋亮平と申します。あまり立派なご紹介をいただきましたので、何かお話しにくくなってしまいたいへん恐縮しております。本日は2640地区の地区大会に松本元理事・会長代理をお迎えして盛大に開催できますことを、まずおめでとうでございます。お祝い申し上げる次第でございます。本日は、来賓の代表として今井現理事が前にお座りになって、その前でお話をしなければならないというのは大変な苦痛でございます。ただいまの佐藤千寿パストガバナーもたいへん緊張されるというお話がありましたものですから、私などは生きているのが大変だというように、皆さまもひとつご理解をしていただきたいと思っております。

本日、このようなシンポジウムに楠ガバナー、大澤パストガバナーのご指名をいただきまして発言させていただきますことをたいへん光榮と存じます。また、私淑いたします佐藤千寿パストガバナーとこのように登場させていただきますことを心から名譽と思っております。

先ほどのご紹介がございましたが、三宅パストガバナーは私と同期のガバナーを務められて、四国の高松の由緒あるお家柄でありまして2代もガバナーを選出しているお宅でございます。確か次年度もガバナーノミニとして、きょうご出席のようでございます。そういう方と一緒にさせていただきますので、何かその点だけは心強いと思っております。

ただいま国連の国際寛容年につきまして、寛容の精神が提唱されております由来をご解説していただきました。ロータリーにどのように寛容の精神が登場したのであるかということを少し検索してみたいと思っております。

皆さんご存じのように、ロータリーというのは、一業一会員制で選ばれた職業人の相互扶助と親睦を目的として創設されましたことをご案内のとおりでございます。それがシカゴクラブにおきまして間もなく「シカゴ市の利益を増進し、市民の中に市に対する誇りと忠誠心をふつきゅうすること」という第3条が追加されました。この綱領の第

3条を契機として、世のため、人のためという社会的存在意義がたいへん強く強調され出したわけでございます。

これに対しまして、以前からの、会員の親睦を主流とする会員との間に対立が生じてしまいました。当時のウィリアムネス・シカゴクラブ親睦委員長はこのように言っております。「所詮、社交クラブなのだからみんなが忌憚なく心と心を通わせ合う状況なくしては、世のため、人のためにはなり得ない」と、嘆いたそうでございます。いかに、その対立が激しかったかということをお察しませます。そして、このような事態を収拾できるのはロータリーの生みの親である自分以外にないということで、ポール・ハリスは会長に就任いたしました。

続く1908年、この年度もポール・ハリスはご自分の意思を貫くために会長に留任したようでございます。たまたま、そのときに先ほども「He profits most who service best」というお話がございましたが、チェスレ・ベリーとアーサー・シェルドンがロータリーに入会してまいりました。理論家でありましたシェルドンは早速、拡大委員長に就任しまして、サンフランシスコ・ロータリークラブをはじめとしてアメリカ各地にロータリーを誕生していったわけでございます。しかしながら、社交団体に最も必要であった親睦というものを、どうもないがしろにしたせいか、シカゴクラブの中に罷免の動議が提出されてしまったわけでございます。

いろいろといきさつがございましたが、ポール・ハリスはこのように言っております。「人の心の異なること、その外貌の異なるが如くである。思索の影はその色の影よりもはるかに多様である。人の信念はその気質、環境、経験等の無数の要因により形成される。指導者はあくまでも寛容にして忍耐をもって事の判断をする用意がなければならない。独断的ロータリーの主張は所詮、無益である」このように回顧したと書いております。

このような苦い経験により深い反省と寛容の精神がポール・ハリスのロータリー思想の中の根本理念として確立したと、私は理解しております。試行錯誤の結果、1910年、ポール・ハリスはまたこのように言いました。「ロータリーは親睦の中だけにあるものではない。奉仕の中だけにあるものでもない。奉仕と親睦を同等に評価するところにロータリーの根本理想がある。すなわち親睦と奉仕が調和したところに奉仕の哲学、すなわち寛容の精神にほかならない」このように宣言をいたしました。

1911年『The Rotarian』の発刊にあたりまして、その創刊号にポール・ハリスは「もしも神の摂理によって、私がどこかのコロシヤムの舞台上に立たされ、何か一言いえと告げられたら“寛容”と大声で叫ぶであらう」と、あの有名な論文がここに掲載されたわけでございます。当時の激しい論争の中に、寛容の精神をもって終結を図ったと理解できるのではないのでしょうか。このような経過を経まして、寛容の精神がロータリーに登場してまいりました。親睦に最も重要なことは、寛容の精神にほかならないことはご納得いただいたと思っております。

先ほど、会長代理からたいへん高邁なロータリー論を拝聴いたしました。ロータリーそのものに寛容とはどういうことかということ結びつけて考えてみたわけでございます。古典的ロータリー、進歩的なロータリー、中庸をいくロータリー、いろんな人がいると思うんです。これが寛容という一つの心の中で一つに結び合うのが本当のロータリーの理想的姿ではないかなと、先ほど会長代理のお話をお聞きして感じたわけでございます。

ただ、寛容という優雅な言葉に流されて「人の言うことをすべて広い心で聞き入れる」という広辞苑の如くこれを理解してしまいますと、物の本質を見失ってしまう恐れが多分でございます。そこで、これから幾つかの点を提言いたしまして、皆さまとともに考えてみたいと思っております。

そもそも親睦というのは奉仕のために知り合いを広めること。思いやりの心に富んだ職業人同士の出会いを最も重要視いたします。「心の友を得て、もって奉仕の契機となすべし」、このように例会の親睦により、信頼や友情を育み思いやりの心の向上によって自己改善を図り、それを社会に還元するのがロータリーのシステムでございます。すなわち住みよい社会をつくる創造力の活力が親睦だと理解いたします。

1995年11月の理事会報告を『ロータリーの友』の3月号で拝見いたしました。ちょっと読んでみますと「クラブの指導役員は会員および会員候補者に対し、例会の意義と重要性、100%の出席率を過度に強調することなく、60%の最低出席率規定とすべてのクラブ活動に全員が積極的に参加することを強調するよう奨励されております」、私は目が飛び出すような思いをしてこれを読ませていただきました。

これをきょうの本来の話題にしたいということで、いろいろ思い当たることございましたもので、実は昨日の列車の中で佐藤千寿パストガバナーにこの件をお伺い

たしましたところ、このような結果でございました。実は、この『ロータリーの友』の3月号の記事は誤訳であるということです。ですから、お読みになった方はこれをご失念していただきたいと思います。これは日本の『友』を訳したものでなくて、エバンストンのほうで翻訳したものと理解しております。今井理事がここにいらっしゃいますので、後で確認したいと思いますが、そうでございますね？

で、これを訂正いたします。皆さんもぜひ心してお聞きになっていただきたいと思います。「理事会はロータリークラブ指導者がクラブ会員と会員候補者に対して次のことを強調するよう奨励しています。1.規則正しい出席の意義と重要性」、意義と重要性を説いてくださいということですが、「60%の出席規定」は「最低限の60%の規定は確実に守っていただかないと会員資格を消失してしまいますよ」ということでございます。それから「100%の出席をいたずらにこだわることなく、できる限り会員一人々がクラブの活動すべてに積極的に参加することが、クラブにも地域にも大切である」ということ。ひとつ、最初にお読みいたしました『友』の記事はこういう文の間違いを訳したとご理解をさせていただいて、ご失念いただければ幸いです。これを寛容の精神でございませう。どうぞひとつこのようにご理解していただきたいと思ひます。

いま例会についてもお話ししましたが、私はロータリーに入会させていただきまして34年でございます。昔はよくロータリーの例会は「心のオアシス」とか、「ロータリアンは心を求めて例会に臨み、境地を得て例会を去る」ということをよく先輩ロータリアンから耳にいたしました。これを本当のロータリーの理想的例会であるし、また真の親睦の精神ではないかと回顧しているわけでございます。現実には、最近のロータリーの親睦の手段の主流が親睦旅行や親睦ゴルフ、あるいはパーティなどによって変わってきているのではないかと。また、例会における親睦がたいへん軽んぜられてきてはしないかと思ひてならないわけです。

次に、親睦の効果をより高める意味からも集団形成の基本原則である会員増強とか、会員選考が重要なことは言うまでもありません。しかしながら、会員増強第一主義に陥ってしまって、いろいろの規則の簡素化がロータリー精神の低落を招いてはいないでしょうか。本来の会員選考の意義は、ロータリーの基本的な世のため、人のためを目指す人の中でいちばん自他の分け隔てなく自分に誠実であり、自分の生き方に自信のある職業人、職業分類の原則に適合

させて選考すべきであります。このように選考規定をしっかりと守っていただければ、理想的なロータリアンの集まりになるはずでございます。あまりにも増強を急ぐあまり、かえってこれが退会者を増やす原因になりはしないかと苦慮するところでございます。

クラブ細則の第11条第2節に「職業分類と会員資格の条件をクラブ理事会が確認すること」と、推奨細則が変わってまいりました。細則のために強制力はないというものの、会員選考の意義を失わせるほどクラブ理事会の権限を強化する必要はどこにあるのでしょうか。入会に対して異議の申し立てもクラブ理事会の多数決によって決められると、こうなると、果たして職業分類委員会とか会員選考委員会の任務とは一体何なのか、問い直してみたいのも人情だと思ひます。

昔、私が聞きました例会というものについてのもう一つの例を申しますと、「例会の出席なくしてロータリーなく、一業一会員制なくしてロータリーなし」という名文句も聞いておりました。この一業一会員制を緩和することがロータリー精神の凋落を招かないか。こういう点から職業分類をもう一度、見てみたいと思ひます。

ポール・ハリスは都会の職業人に人間性を回復させるためのクラブをつくりました。相互扶助と親睦を維持するために一業一会員制を堅持したわけでございます。1930年のシカゴ大会で、クラブに功績のあった引退者を救済する目的としてパストサービス会員制を採択、1939年には保有の職業分類を若い人に譲らせたが、クラブにも残って活躍してもらいたいという人のためにベテランメンバー制を採用いたしました。これは42年にシニアクラブ会員と改称されております。

この一業一会員制につきまして、アラバマ州のバーミングラムロータリークラブはこのようにその真髄を説いております。「ロータリアンはその職業の代表としてロータリアンになったのではなく、ロータリーがその業界へ派遣した使者である」、そうしますと、派遣されました会員の責務は重大でございます。その業界にロータリー精神を浸透させるという大きな義務がございます。すなわち、責任の所在は明確でありますし、そしてその使者は一人で十分である。これがアラバマ州バーミングラムロータリークラブの考え方でございます。

シニアクラブ会員やパストサービス会員制度の採用が、既に一業一会員制の拡大解釈であったのには違いありま

せんが、毎回の規定審議会で提出されている一業五会員制とか、正会員と名誉会員の2種類制の議案など、将来、この一業一会員制解消の一步につながらないかと苦慮したところでございます。

とうとう前回の規定審議会でパストサービス会員の資格条件を改正いたしまして、引退者、すなわち無職の人の入会を認めることに至りました。われわれロータリアンは綱領を最も大切にいたします。有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成するのがわれわれの務めでございます。これをどのように解釈したらいいものでしょうか。そしてまたパストサービス会員の資格の改正については、職業分類をどのようにしたらいいかという示唆はいただいております。このように、急激な拡大を急ぐあまりロータリーの最大の特質であった職業分類の存在意義を放棄することがロータリーの衰退につながらないかと、私は苦慮いたします。

以上、いろいろと親睦、例会、会員選考、職業分類等について問題を提起させていただきました。どれをとりましたが、寛容の心をもって理解するにはあまりにも事態が重過ぎることではないか。このように感じてならないわけです。ぜひ、2640地区の皆さま方も、この寛容の精神は尊重していただかなければなりません、ただ無差別に寛容してはならないということを肝に銘じていただきたい。これが私の提案でございます。

最後に、結論として私の考え方を申し上げたいと思ひます。ロータリーは親睦と奉仕を車の両輪にたとえられております。そして、これはバランスの良いことを最も重視します。これがロータリーの根本原理であります。このバランスを欠いてしまうと、ロータリーそのものが円滑に機能しなくなってしまいます。親睦を寛容と置き換え、寛容を単なる寛大というふうに置き換えてしまいますと、見せかけの親睦でよしということになってしまうのは、まさにロータリーの墮落であります。

また、奉仕というのを単なる施しというようにわきまえてしまいますと、職業人としての職業奉仕の倫理観が失念し、ロータリーの根本理念が失われてしまいます。私たちの最も愛するロータリーが滅亡してしまいます。いまこそ、ロータリー創業時の純粋で誠実な態度、そして何事にも全力を捧げた初心の気概を最も必要とするときではないでしょうか。そのような気概をもって事にあたることによって、真の寛容の精神がよみがえり、ロータリーの永遠

が保証されるのではないかと確信いたします。

たいへん雑駁でまとまりのつかないことを提言いたしました。私の心の一部分を皆さま方に申し上げまして、このへんで終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

大澤 土屋パネラー 有り難うございました。ご指摘下さいました『ロータリーの友』3月号33ページに重大な誤りがございます。5月号に訂正記事が掲載される予定ですのでご一読下さい。

次に三宅俊三パストガバナーにお願い申し上げます。四国の高松市からおいで頂きました三宅パネラーは外科医の先生でございます。病院長として、県医師会の役員として、日本臨床外科学会評議員として、とにかくじっとしてられないよく働く方で、年中夜明けとともに病院に出かけられ、そしてどんな時間外でも全然嫌な顔一つ見せず急患の診察に応じておられる姿に感服するばかりだと同業のお医者さんが話しておられます。

そして『鏡の前の外科医』を地でいっておられる先生とご紹介申し上げます。ご存知の方も多いかと思ひますが、イタリアのある外科医の自叙伝に書かれたものですが『外科医がいよいよ手術場に入る前に鏡の前で手の消毒をいたします。消毒しながらこの病気に対して、この手術はやらねばならないかどうか、手術を行うについて自信があるかどうか、鏡の中の自分に反問しながら消毒をいたします。手術 それは1時間ですむものもあれば8時間、10時間かかる手術もあります。その手術を終えて手術場を出たときもう一度鏡の前に立って汚れた手を洗いながら鏡の中の自分に、患部は自分の見ただけ通りであったか、自信の持てる技術を十分発揮して正しい手術をやったか、自ら反問するのです』と言う話です。

外科医でなくとも、我々ロータリアンは常にこうでありたい、朝晩鏡の前で自分の日常生活行動を考えるべきではないでしょうか。三宅パネラー 先生の職業を通じて『寛容の心』を紐解いてください。宜しく願ひ申し上げます。

忍耐強く寛容の心を実践



三宅 ただいまご紹介いただきました2670地区高松から

まいりました三宅でございます。ただいま大澤パストガバナーから過分のご紹介をいただき、実は身が震えるより足がすくむような思いがいたしております。また私が日ごろ愛読しておりますデュボニーの『鏡の前の外科医』のご紹介までしていただきまして本当にありがとうございます。

また、本日、この地区の地区大会が松本R.I.会長代理、今井R.I.理事ご臨席のもとに、たくさんの方がお集まりいただいて楠ガバナーによって開催されましたところへ、こういう大役を命じられまして出席させていただきましたことを非常に有り難く感謝し、恐縮に存じております。

先ほど大澤パストガバナーからパネラー指名のご説明がございました。最初は「パネラーしてくれよ」「はい、はい」。人がいいものですから、大澤さんの言うことはすぐ何でも聞きます。その次がいけません。お相手のパネラーは佐藤パストガバナー、同期の土屋パストガバナーだと。これは大変なことに「うん」と言ってしまったと後悔したがあとのまつりです。佐藤パストガバナーは、ロータリーの神様、同期の土屋パストガバナーは同期生中の模範生でございます。また実は、この地区の中島パストガバナーは国際協議会のリーダーとしてお教えいただいた方でございます。平岡パストガバナー、土屋パストガバナーは中島門下生のトップクラスでございます。私は後ろからのトップでございます、中島パストガバナーから「しっかりやれよお前は、パストガバナーになって一体どれぐらい勉強したか」と、きょうは試験を受けているような感じでございます。

そういうことはさておきまして、昨年の10月14～15日に2710地区の大会で、きょうお話されました佐藤パストガバナーが『寛容について』という記念講演をされました。これはいい機会だ。お聞きしてきたら、きつときょうの材料になるだろうと早速、出かけました。ところが、私のようなのきなロータリアンには次元が高くて、難し過ぎ逆に頭痛の種を現在まで残してしまいました。

そういうことで、本日は私なりに、低い次元で話をしてみたいと思います。寛容ということは、字引を引きますと非常に難しく書いてあります。「度量が大きいとか、あまり人を責めない」。当たり前のことです。当たり前のことですが、考えれば考えるほど、お寺さんじゃございませんが、禅問答をしているようです。あとで楠パストガバナーから、「寛容とはの問いに対してお答えを頂戴いたしたい」と感じております。

私は、いま紹介されましたように高松で開業しております。地方都市でございます。万が一、だれかが私の病院の隣に私と同じ規模、あるいは私以上の病院を建てますと言ったら、私は「どうぞ、どうぞ、建築してください」と、果たして言えるだろうか。現在の社会情勢ですから、隣に建ててはいけないという法律はございません。建てていいわけです。しかし、私はなんぼなんでも俺と一緒にの外科病院を隣に建てられたら俺のところは飯が食えんようになるのじゃないかと考えざるを得ません。これを非寛容な心とそしるなら甘受せざるを得ません。

病院の現状は生存競争が激しい。これは皆さん方のお職業もそうでしょう。病院はそのうえ皆さんの職業以上に法律のガンジがらめで青息吐息です。しかも患者さんからは時間外の来院であっても「医者に行けば24時間診るのは当たり前や。何で診んのや?」と怒られるような状態です。私は医師は24時間、365日働くのが当たり前だ、患者さんのために尽くすのが当たり前でライセンスをいただいていると考えていますので時間外でも診察しております。職業奉仕を通じてのささやかな寛容の心といえるかもしれません。

こうした心を医師全員がもちますと、たらい回しによる、いろいろな問題は絶対に起こりません。起こるはずがない。起こるといっては、医師としての心構えがいささか足りない——この中にお医者さんがおいでになれば失礼ですけれども——のかもしれませんが。そういうことを考えておりますと、この世の中は寛容であったり、非寛容であったり、それが入りまじったのが人間社会ではないかと感じるわけです。

いまカウンセラーからご指摘がありましたように、きょうは職業奉仕について話すことになっています。皆さまご存じのように、ロータリーにおける職業奉仕は全職業人を対象とするロータリー倫理訓、俗に言う“道徳律”に全部書かれています。私は医師という幅の狭い職業をもっています。皆さんもそれぞれご立派な職業をもっておられます。ロータリアン以外の職業人の中にも、ロータリーで言う職業奉仕という観念をもっておられる方もいるでしょう。しかし、私はロータリアンこそはすべての人がこの職業奉仕という概念をもつ必要があり、それはロータリーの基本をなしているものだと感じております。

ロータリーの倫理訓に照らしてみますと、私は経済とか政治のことは全然わかりませんが、いまの政界の不透明さ

やお互いの足の引っ張りあい、またその他いろいろ見ていると、国のため、社会のため、人々のために政界の方々は本当に一体何をしているのだろうかという感じを覚えます。ひるがえって私も職業人として「お前は医者だろうか?」

いまのエイズの問題は一体何だ。あの医師会の賄賂の問題は何か」と言われますと、確かに私どもも恥ずかしい思いをしております。

皆さまは、横浜の有名な井坂 孝ガバナーをご存じだろうかと思えます。この方の『月信』の第1号(昭和6年)に書かれた言葉を思い出してください。ご存じだろうかと思えますが、あえてもう一度、述べさせていただきます。「ガバナーとして全日本のロータリアンに告ぐ。ロータリアンとして守ってもらいたいことが3箇条ある。これに違反するとロータリアンたり得ない。第1条、ロータリアンよ、約束を守れ。第2条、ロータリアンよ、賄賂をおくるなかれ。第3条、ロータリアンよ、いたずらに慈善事業や寄付集めに憂き身をやつすことなかれ。ロータリアンはロータリーの綱領達成にかぎるべきである」という名文を発表されました。

新しくロータリアンになられた方は、初めてそんなことを聞いたと思われるかもしれませんが、私は、井坂パストガバナーのこの言葉こそ、いまでもロータリアンは守るべきだろうと感じます。

と同時に、昭和12年、ちょうど戦争の軍閥の圧力が強くなったときに、井坂パストガバナーは「ロータリーは一業一会員制を見誤り、一部の金満家のクラブになっている。このことは、ロータリーの本質からいっても残念なことである。なすべきことは、ロータリーの庶民化だ。一人でも多くの一般の人たちにロータリーの奉仕を説き、理解してもらうことだ」ということが、そのあとの『月信』に発表されております。いかがでしょうか。

佐藤千寿パストガバナー、土屋パストガバナーが言われた中で、ロータリーは何だろうかという提案をされております。確かに、戦後のロータリーは日の出の勢いで拡大され庶民化されてきました。しかし、井坂ガバナーが後段で言われている、ロータリーを理解してもらう奉仕活動をわれわれはしているのだろうかという疑問を私は感じます。つまり、ロータリーの職業奉仕の形骸化が露骨にあらわれてきているのではないかと感じております。

先ほど土屋パストガバナーのお話にありましたように、ロータリーの根本に親睦と奉仕がどちらにも偏らず、調和

し、寛容の精神が含まれていることを考えますと、日常生活には必ず職業奉仕が伴ってまいります。私は日ごろから日常生活＝職業奉仕＝ロータリーでなければならないと信じております。ですから、例会に出席すること、あるいはきょうのような地区大会、ロータリーの行事に参加することは当然なことでございます。ところが私のクラブだけかもわかりませんが、例会時間が始まり、36分たちまして、これからスピーカーが話をしようとする時、ダダダッとして行かれる会員がいます。これは高松クラブだけかもわかりません。皆さんのクラブがそうだとはいえませんが、実際に恥づかしいかぎりです。さびしいというより「あなたはロータリアンですか?」と聞きたくありません。

先ほど土屋パストガバナーから60%のお話が出ました。私は昔から60%というのは出席競争のときの60%であって、出席時間60分の60%で帰れると考えているのがおかしいといつも主張しているんですが、なかなか理解してくれません。確かに60分に60%を掛けると36分です。計算上はそうです。しかし、こうした例会出席の形骸化を露骨にみせられると真のロータリアンとは一体何だろうかという「?」をいつも持つようになってまいりました。

また私の地区のIMの会議を見ますと、お互いに「お前こういうことを質問してくれよ。そしたら俺はこう答えるから」とIMそのものが路線を引いてある。列車に乗ってピッピッと走っていけば終わるようにできている。果たしてこれがロータリーの討論会をやるIMなんのでしょうか。実は、私の地区のあるガバナーのときに「本音で語ろう」とIMをやりました。本音で語りたくても雰囲気は本音で語れない雰囲気だったのかもしれませんが、いつもと同じ線路の上を走った結果になって、そのガバナーは「俺の気持ちはだれもわかってくれなかった」とがっかりしてました。私も本音で言いたかったんですが、何となく周囲の雰囲気から言っちゃだめだと口をつぐむ結果になってしまいました。このようなことで、例会以外のロータリーの会合も形骸化してきていると感じました。

私は昔、中国、兵庫、四国が1つの地区の時に入会させていただきました。ですから、きょうおいでの会長代理の松本先生、あるいは直木先生、平島パストガバナーに、地区協議会でまだ入ったばかりでロータリーの「ロ」の字も知らないのに知ったげな顔をして質問して怒られたり、褒められたり、頭をなげられたり「お前、そう文句言わずに

しっかりロータリーを勉強せよ」と言われてまいりました。『ロータリー日本五十年史』が出ましたときに、一部のところで何か理解できないことがありまして、直木パストガバナーにお手紙を差し上げました。ご病気でふせておられました中ですぐご返事をいただき私は疑問点が解決できました。いまなおそのお手紙を大事に持っております。

そのように、本音で語る会があってもいいのではなからうかということも感じております。ですから、きょうのこの会のあと時間をいただきまして、素晴らしいロータリーの神様がおいででございますので、会場の皆さんからどんどん質問されるとよいのではと思ったりします。これは私の勝手な想像でございます。

先ほど申し上げましたように、職業奉仕はも形骸化されて、言葉だけの職業奉仕になっているのではないかと危惧しております。先ほど松本会長代理からブラウン会長についてのお話がありました。また、佐藤パストガバナーからブラウンR.I.会長の家庭の絆を強めることを強調されておりました。考えてみますと、社会の単位は家庭であることは当たり前なんです。家庭の絆を強めることも当たり前。当たりの前のご話がわざわざ強調され提案されることもおかしいと思うのです。現在の社会は物事の本質をなおざりにし、形骸化が進み、歯止めのないいいかげんさがまかり通っていると思います。厳しさのない寛容ということが言えると思います。

私は仕事上、警察にも関係しておりますので、いろいろな違法行為をする人とも接触します。覚醒剤、シンナーの常用者、暴走族、その他、たくさんいます。これらの人は家庭を破壊したり暴力をふるって家族の絆を断ち切るということがあつたのは事実でございます。

私の病院で起こりました事例をお話申し上げたいと存じます。中学生、高校生が高松市内のある小さい公園に集まりまして、自動販売機からお酒を買って、それを飲みシンナー遊びをしておりました。シンナーも量を間違えますと死んでしまいますし、狂乱します。その中で1人倒れ、2人倒れ、全部で13名です。救急車が13名を4台で運んできました。外来には多くのベツトがありませんので、外来の床の上に寝かしておりました。吐き苦しみ、のたうち回り、半狂乱になっている姿を見ましたときに、私は、まだ地獄へ行つたことがありませんので地獄は知りませんが、地獄とはこういうものかという感じすいたしました。当

然、私たちも警察へ連絡いたします。救急車も連絡します。各家庭にも連絡して家族に来てもらいます。かけつけてきた親御さんの第一番目に吐いた言葉が「またですか。いや、一昨日もこれをやったんです」というものでした。親は子どものシンナー遊びをとっくに知っているのです。しかし結局、親は叱るだけ。あるいは仕方がないと黙認する。ある親は、「先生、少し子供たちを怒ってください」と人に頼む始末。主客転倒なんです。「絶対に許さないぞ」と親が自分の体を張らないのです。なしくずしの寛容は無責任ということですよ。

このようないろいろなことがございまして、私は職業奉仕における寛容とは、このような職業上遭遇する個々の事例の中で忍耐強く寛容の心を実践していくことにつきますと思うのです。最後に、これだけはひとつ皆さんにご紹介しておきたい。この地区の方は『ロータリーの友』の12月号をお読みになっていると思いますが、ここに、裕美記念国際青少年基金のことが詳しく報告されております。これは、ロータリーの寛容の素晴らしさをあらわしたものだと思ひます。この地区でこういうお話をするのは失礼ですが、これを読みまして、『裕美国際青少年基金』の寛容の素晴らしさに感激しまして、僅かですがガバナーに基金を差し出させていただきました。このような素晴らしい寛容の心で奉仕活動をしておられるこの地区の皆さま、私のお話がいづらかでも役に立てば幸いです。どうも長時間ありがとうございました。(拍手)

大澤 三宅パネラー 有り難うございました。我が地区より送り出しました交換学生 柴谷裕美嬢の不幸な交通事故死に対する『ユミ基金』に早速にご献金下された由、誠に有り難うございます。

『寛容の心』はロータリアンであるならば常に意識して、職業奉仕の中で、それは日常生活の中で寛容の心を持って行動すべきだと教えていただきました。

それでは、佐藤パネラーにまとめをお願い申し上げます。

それは職業奉仕の中で日常生活の中で寛容の心をもって行動すべきだと教えていただいたように思います。それでは、もう一度、佐藤パネラーにおまとめをお願い申し上げます。



「貧困撲滅のための10年」をテーマに

佐藤 予定の時間になってしまいましたが、最後に10分ばかり頂戴いたしたいと思ひます。先ほど国連のテーマとR.I.会長のテーマはどこかでつながっているんだと申しましたが、国連は1996年のテーマを「貧乏の追放」ということにおいでしております。そして、97年から2006年までの10年間を「貧困撲滅のための10年」というテーマにしております。今年度の会長ジアイは「新世代を育成し未来を築こう」と呼びかけ、新世代の育成に非常に熱心であります。その「新世代プログラム」の中に、ちゃんと「貧困の撲滅」を入れております。

然らば、「貧困とは何だ?」ということですが、世界銀行のマクナマラ総裁の言葉の中にこうあります。「貧困とは栄養失調、無学・文盲、病気、汚い環境、高い乳児死亡率、低い平均余命、そして人間の体面を下回るほど非常に限られた状態を言う」と——。そしてジアイ会長は、プログラムの中で「ポリオ・プラスを支援する。保健教育に重点を置く。早期児童教育に焦点をあてる。薬物・アルコールの乱用を防止する。エイズに対する認識を深める。身体障害者のニーズを満たす。貧困問題に対処する。飢餓と戦う」ということを入れております。とにかく、国連は本年から紀元2000年までを貧困撲滅のための10年という計画を立てていることをまずご紹介しておきます。

われわれロータリーとしては、そんな大きなことにすぐ手が届くわけじゃございませんので、きょうは「寛容」というテーマです。まとめとして、じゃ、われわれに何が、できるか。当面、どういう心構えでやったらいいかという考え方をご参考までに申し上げておきます。まず、国際奉仕の部門として、今後われわれの企業はどんどん海外へ出てまいります。私のほうも既に海外に5カ所も6カ所も工場を出しておりますけれども、岡倉天心の言った「アジアは一なり」というのは虚構でございます。

アジアは一つどころか、アジアはたいへん多様な国でございます。たとえばフィリピンを説明する言葉にハロハロ文化というのがあります。ハロハロ文化というのは、ハロハロというフィリピン人の大好きなアイスクリームをさして言った譬です。アイスクリームの中へ刻んだ果物とか、豆とか、いろいろな物をみんなぶちこんで、そこへソーダ水をぶっかけてがちゃがちゃひっかき回して食べる。これがつまりハロハロ文化だということです。

こういうたとえをした人がございます。ビニールの袋の中に小豆とか大豆、そら豆等々色々な豆を入れまして、それを振ってみせます。しかし、いくら振っても一つのアンコにはならない。混ざり合うだけなんだ。要するに、われわれの行っている国々はみんなそれぞれ個性を持って、ただ混ざり合うだけなんだ。その混ざり合ったのが、同じ一つのアンコには決してなりっこないんだ。これといかに仲良くやるかということを考えなきゃいかんと。

そういうことで、海外へ行く人は日本人の習性で「日本人村」をつくる。これは日本人の悪い癖です。海外へ行っている商社の人たちでも、休みごとに日本人だけ集まってカラオケをやったり、ゴルフをやったりしている。私はずちの社員には「日本人とつきあうな」と言うんです。「ご夫人方はボランティア活動をやれ」と。現地へ行つて、現地のの人たちとボランティアをやる。男の人は現地の文化を学んで来いと。お互いの文化を理解しなければ、寛容の精神ということとは解りっこない。そういうことを厳しく言っております。

それからもう一つ社会奉仕の面では、単なる寄付ではなくて、これからの社会は外国人労働者もどんどん入ってきますし、非常に難しいものがあります。そこでどうするか。やはり、われわれの社会秩序をきちっと保つために社会に勇気をもって参加しなければならぬと思うんです。

先ほど大澤リーダーがエドモンド・バーグの話を紹介していただきましたが、エドモンド・バーグは1729年生まれ、18世紀のグラスゴー大学の総長にもなりました。文筆家であり、政治家であった人でございます。このバーグの言葉は「発言しない、行動しない善人は悪魔の味方である」というものです。実は、今井さんはお聞きになっていると思うんですが、確かどなたかR.I.理事が、エドモンド・バーグがこう言っていると引用しておりました。理事の名前は忘れましたが、国際協議会でガバナーノミニーにお話をなさった演説の中にあつたはずでございます。そういうことでロータリアンは積極的に行動しなければいけない。そして行動することによって、これから社会に参加しようということでございます。

さて、それでは事例を一つ紹介します。先ほど、たくさん民族が混ざり、ボーダレスの世界になってきた、日本にも外国人がどんどん入ってくる、違った価値観を持った人が集まってくると思ひ上げました。そのときに必要な心構えは何だ? 私どもはカリフォルニアのシリコンバレー

一に工場があるんですが、その駐在員の子供が通っている小学校の校訓ですが、二十四箇条あるのだが、その冒頭第一条——“I respect difference in others”というのは極めて印象的です。その外にも“I accept that all people have their own gift”“I respect myself and other people”“I’m careful not to put people down”などとあって、お互いの違いを尊重しよう、人それぞれに良い所がある。他人を押さえつけてはならない……という様に噛んで含めるが如く教えているのです。

これも非常に印象に残って、興味があるから書き取ってきたんですが、インドで国内線の飛行場に行きますと、インディラガンジー、マハトマガンジーの言葉などの教訓が書いてございます。インドという国は45の種族、500万人以上の話す言語の種類が264というんです。宗教はヒンドゥー、イスラム、ジャイナ、シーク、ゾロアスター、ユダヤ、キリスト教、あらゆる宗教がごちゃ混ぜになっている国。隣同士、向こう三軒両隣、英語でなけりや意思疎通ができないというぐらゐの国でございませぬ。

私もインドに関係会社がございますがよく行きますが、英語とヒンディー語でマハトマガンジーの言葉が書いてございます。We must cease to be exclusive Hindus or Muslims or Sikhs, Parsis, Christians, Jews, whilst we may staunchly adhere to our respective faiths, we must be Indians first and Indians last.

—Mahatma Gandhi—

ヒンドウ、ムスリム、シーク、パーシー、クリスチャン、ユダヤ、たとえ各々がその尊ぶべき教義に揺ぎない信仰を捧げるにしても、独善排他の徒たることをやめよ。我々は後にも先にもまず共に同じインド人として生きねばならぬ。

—マハトマ・ガンディー—

その次にインディラガンジーの言葉が書いてあります。英語のほうは省略して私の訳を言えば「私たちの住む世界は小さい。しかし、私たちみんなが相携えて仲良く美しく生き、相ともによりよい生活をするだけの余地はある」、こういう言葉が書いてあります。こういうことが、われわれ個人としてもこれから生きる心構えではないかと思うわけでございます。

最後に、こういう時代に、今度はわれわれ個人としてどう生きたらいいか。いろいろ紛争も起こるだろうし、嫌なことがこの世の中にはたくさんございます。しかし、個人生活の中では何でもプラス思考で考えよう。いいほうだけ

見ようということでございます。

実は非常に印象に残った新聞記事があるんです。ある女の弁護士さんが書いているんですが、この人のお友達がヘリコプターの操縦士で墜落して死んでしまった。整備士も一緒に死んだんですが、それが操縦のミスか、整備のミスかうやむやだった。その後、調べた結果、整備のミスだとわかった。そしたら、その操縦士の未亡人がこう言ったんです。「主人はあのヘリを操縦して亡くなったんです。補償はいただきましたけれども、原因が整備ミスか操縦ミスかわからなかった。でも、ようやく整備ミスだとわかったんです。そうすると主人は完全に被害者です。あの事故で整備士はもう亡くなったけれども、あちらが加害者なんだから本当は整備士の奥さんも一言、私のところへ謝りに来るべきじゃないか。それも梨のツブテです」と、苦情を言った。

そしたら、この弁護士さんはこう答えた。「亡くなった人はどう思っても帰ってこないわ。それより、もしご主人のミスだったら、あなた自身が一生、肩身の狭い思いをしたでしょう。そうじゃなかったんだから、あなたはこれから正々堂々と生きられるんじゃないですか。それが何よりのプレゼントですよ」と、答えたというんですね。だから、物事はそう考えるとうまくいくんじゃないかということ、最後に落語のオチじゃないけれど、落ちみたいにして私の寛容の話を終わらせていただきます。

大澤 有り難うございました。寛容であることの難しさ。考えれば考えるほど難しくなってきます。普段、気安く使っていた寛容について、奥深く、難しい内容であることを改めて教えていただきました。しかし、寛容なしに平和はなく、民主主義も発展いたしません。

寛容が来るべき世紀における全人類の課題でありましょう。

早や時間がまいりました。シンポジウムとは、一つのテーマについて何人かの先生が意見を述べ、聴衆の質問に答える形式の討論会なのですが、私の時間の配分がまずく皆様からのお声を聞くことができませんでした。本日のお三方のお言葉をかみ砕き、お持ち帰り下さって、クラブで、ご家庭で、さらなる『寛容の心』を育てていただきますことを念じてシンポジウムを閉じさせていただきます。ご静聴有り難うございました。